

みなさん、こんにちは！肌寒いなか、貴重なお休みにもかかわらず、こうして足を運んでいただき、ご苦労さまです。わたしは、なかなかガラスの心臓で、すべて話すことは事前に文章にしています、今日はだから本来なら、秋晴れ！を喜びたかったのですが、残念ながら少し雲が多くて寒いですね。ですが、きっとこの熱気で、話が終わる 30 分後には秋晴れとなっているはずですよ。あと、今日の話では、「心臓」の話がたくさんでできます。

わたしは、先ほどご紹介にあずかりました、同志社大学教員の岡野八代と申します。今日はいまから 30 分の間、「市民の力で民主主義を取り戻す』ことに向けた、お話をさせていただきます。

今日は本当に美しい日になりました。本来ならみなさんと、素晴らしい季節を満喫したいところが、いまの政治のあまりの醜さに、わたしは燃えたぎるほど、怒りを感じています。わたしはいま、憲法を考える憲法サロンを定期的で開催する京都 96 条の会を主催し、そして戦争アカン！京都おんなのレッドアクションで行動をしています。レッドアクションでは、その名前のお通り、怒りを表す赤い服を着ての行動ですが、今日は少し気持ちをクールダウンするために、青の服でやってきました。きっと今日お集まりのみなさんも、いてもたってもいられずに、こちらに足を運んでくれたのではないのでしょうか。

つい先日、沖縄市民の反対の声を文字どおりブルドーザーで踏み潰すかのように、日本政府は、辺野古埋め立て工事を始めました。沖縄の人たちからは、「植民地扱いだ」との声も広がっています。沖縄の問題は、なにも沖縄だけの問題ではありません。いまわたしたちの手で、一部の政治家たちの暴走を止めない限り、わたしたち自身もまた、あたかも宗主国の暴力に振り回される植民地の住民のような扱いを受けていると断言しても言いのではないのでしょうか？市民の声を無視し、市民の願いを踏みにじる、平和な生活も、そして憲法さえも破壊する。さらに、弱い者には傲慢で卑劣、強い者、ここでは合衆国政府や大企業を念頭に置いています、強い者にはあくまで卑屈。そのような人びとが支配する社会はもはや、植民地の世界と変わらない、わたしはそこまで考えるようになりました。

9 月 19 日のみせかけの、国会のルールをも踏みにじった戦争法の制定以降、防衛装備庁の発足など、わたしたち市民の気持ちを逆なでするようなことがつぎつぎと決定されています。みなさん、防衛装備庁の、あの、ロゴを見ましたか？ 50 年近く守られてきた、かつては日本の平和ブランドに貢献してきたと断言してもよい、武器輸出三原則をあざ笑うようなロゴを使用しています。そのロゴを見

れば、「世界中どこにでも、どんな武器でも、いつでも売ります」といつているかのように感じざるを得ません。そのロゴでは、戦艦、戦闘機、戦車が地球上を駆け巡っているのです。

ちなみに、防衛装備庁の説明では、地球をイメージする「円を取り巻く3つの線は、陸海空自衛隊の代表的な装備品である車両、護衛艦、航空機を表しています」と認めています。戦車ではなく車両とか、戦闘機といわずに航空機とか、正直にいわないところが、まさに安倍の心臓ですね。

いま使った、安倍の心臓という言葉ですが、嘘をついたり、戦争を積極的平和と言い換えたり、約束を守らない人の心臓のことを意味しています。国際的な場、しかも国際連合という平和と人権を扱う代表的な国際機関において、難民と移民の区別がつかなくてもまったく平気な人のこと、つまり無知を恥だと思わなかったり、人権を踏みつけても自分が正しいと言い張る人、もっといえば、人を傷つけておいて、それはその人のためだと言い張るといった、わたしたち市民の想像を超えた、理性も知性も品性も、そして良心もないひとの心臓のことを指しています。心臓に毛が生えているどころではありません。この心臓は自分の欲望以外は、からっぽなのです。心のことを、英語では **mind** ともいい、**mind** とは、知性や理性、そして暖かなハートを意味しますが、安倍の心臓は、心のない心臓です。みなさんも、歪んだこと、嘘を平気で言う人をみたら、怒りを込めて今後、「安倍の心臓」ぜひともご使用ください。わたしの著作権は、放棄しておきます。

さて、こうして貴重な時間をみなさんと共にしているにもかかわらず、どうしても安倍の心臓の話になると、悪いことばかり語ってしまいます。この心臓の話をあまり続けると、こちらの心まで歪んでいきますし、わたしたちの品性も汚れていくようですので、ここまでにします。ここからは、みなさんと、今後のわたしたちの政治をどう変えていくかについて考えてみたいと思います。

今日わたしがみなさんと考えたいテーマは、先ほど申しましたように、「市民の力で民主主義をとりもどそう」というテーマです。

ですが、この「民主主義をとりもどす」という言葉には、少し語弊があります。民主主義を取り戻す？ 〈取り戻す〉、という言葉には、「誰かに奪われたものを返してもらおう」、という意味がどうしても込められてしまいます。たとえば、安倍の心臓の持ち主たちが選挙のさいに述べた、「日本を、取り戻す」がそうです

ね。権力欲にとりつかれた心臓の持ち主たちは、まさに今、市民から「日本を、取り戻そう」としています。たとえば、同じ心臓をもった京都選出の西田昌司参議院議員は、国民主権なんておかしいと述べたと伝えられています。民主主義を理解しないこうした心臓の持ち主たちに、わたしたちは今、闘いを挑んでいます。ですが、わたしたちは民主主義を誰かに奪われてしまったのでしょうか？安倍の心臓の持ち主たちに奪われたのでしょうか？いま日本の民主主義は、どこにあるのでしょうか？はっきりしていることは、安倍の心臓の持ち主たちは、民主主義を目の敵にしている、ということです。かれら自身は、民主主義など欲していません。

9月19日、戦争法が暴力的に夜中の2時過ぎに参議院を通過してしまったとき、前日から仕事で東京にいたわたしは、その日の朝、国会前にでかけました。始めて国会近くにある、日本の憲法の歴史を展示している憲政会館にも訪れました。夜中に国会中継を見ていたときは、涙がでるくらい悔しくて、テレビに毒づいて、暴れたくなるくらい怒りでいっぱいでした。ですが、翌朝、そしていまも、わたしはある意味で清しい気持ちでいます。なぜなら、まだわたしたちに平和憲法は残されているからです。国会審議のルールを破ってまでも、憲法違反の戦争法に賛成した議員こそが、憲法の下で行われている政治、立憲政治を捨て去り、現行憲法下における日本の政治から退場していったのです。そして、現行憲法では、主権在民、つまり民主主義が原理の一つとして確立されているのですから、かれらは民主主義からもお別れをつげていったのです。

さようならあ～、安倍の心臓たち！ ですね

戦争法を通し、日本国憲法にお別れをしていった自民党・公明党、それに追随した政治家たちが、民主主義をわたしたちの手から奪っていったものではありません。まず、今日みなさんと確認したい事実はこのことです。もう一度言います。かれらは、民主主義を破壊しているとしても、民主主義をわたしたちから奪っていったのではないのです。では、民主主義を取り戻すとはどういう意味なのでしょう？ その意味を考えるためには、原点にもどって、民主主義とはなにかを考えてみましょう。

国会前、そしてデモのさい、SEALD'sの学生たちが、「民主主義ってなんだ？」、「これだ」とコールしているのを聞いて、みなさんの多くははっとしませんでしたか？民主主義は、先ほど触れた憲法の原則の一つ、「主権在民」を意味しています。安倍の心臓の西田議員が否定した原理ですね。主権在民、当たり前の原理

ですが、それでもわかったようで分からない気もするので、民主主義が生まれた頃にさかのぼって考えてみたいと思います。

民主主義の歴史は、じつは非常に古く、政治という言葉が生まれた古代のギリシア、なんと紀元前5世紀にまで遡ります。多くの政治学上の言葉は、政治 ポリティクスという言葉を始め、古代ギリシアに生まれました。デモクラシーという言葉の意味を説明すると、デモスは民衆を意味し、クラシーとは、支配を意味しています。ところが当時、民衆の支配は、貴族制などと比べると劣ったもの、当時は、むしろ批判されるべき政治体制でした。貴族性を意味するアリストクラシーとは、優れた人を意味するアリストたちのクラシーつまり優れた人の支配という意味です。

古代ギリシアの時代、政治が生まれたそのときから民主主義は存在していたのですが、古代から哲学者たちは、民主主義を批判してきました。哲学者たちは、民衆に政治をまかせると、自分たちの目の前の利害関係や、声の大きなデマや、「おれにまかせろ」という扇動家にすぐにだまされたりするので、民主主義は最悪の政治である独裁政治の一步手前の危険な制度であるとして、ずっと民主主義を批判してきたのです。今の日本の政治をみていると、哲学者たちの長年の批判には、耳を傾けるべき主張も含まれています。もちろん、当時の哲学者たちの意見には、民衆を見下す態度が現われているという点については、気をつけておかなければなりません。

では、いつ民主主義は、現存する政治体制のなかで、実行可能でわたしたちが選択すべき政治体制となったのでしょうか？

哲学者たちの間で、最悪の政治の一步手前だと考えられてきた危険な民主主義を、むしろ市民が獲得すべき政治体制だと考えた、近代民主主義の父と呼ばれる哲学者は、フランスで活躍したジャン＝ジャック・ルソーです。1712年生まれのルソーの哲学は、その後もフランスの政治に大きな影響を与え、フランス革命の準備をした哲学者だとも言われています。わたしはルソー哲学を研究しているわけではありません。ですから、かれの思想に対する数多くの批判については、ここでは扱いません。またかれが書いた男子教育の書物『エミール』では、主人公エミールの妻として登場するソフィーの教育、つまり女子教育については、その後の女性の権利の剥奪にもつながった、今読むと大変腹立たしい内容を含むもので、わたしは、ルソーの思想を全面的に支持しているわけでもありませ

ん。ですが、近代において、民主主義を再発見し、その意義や価値を説いたルソーの思想には、まさに民主主義の精神の原点が分かりやすく説明されているので、ここでみなさんに是非とも紹介したいと思います。

民主主義を論じたかれの書物のなかで、最も有名な書物は『社会契約論』という本です。社会契約論とは当時流行していた社会契約説をルソーなりに論じた本です。社会契約説とは簡単にいえば、ひとは、生まれながらに備わった人権を、よりよく守るためにお互いに約束し、同意のもとで、社会を作り、社会のなかでよりよく生きるために政府を確立するという考え方です。あらゆるひとは、他人が絶対に侵害してはならない人権を生まれながらにして備えているという思想が、社会契約説の原点にあります。これは、自然権思想、あるいは天賦人権説といわれるもので、現在の日本国憲法もまた、この自然権という考え方、すべてのひとには、そもそも平等に人権が備わっているという考え方に基礎をおいています。わたしたち市民の権利は、政治家や政府に与えられたものではなく、わたしたちに生まれながらにして、本来備わっているものなのです。

さて、この有名な、高校の倫理や世界史の教科書にもでてくるルソーは、『社会契約論』の前に『人間不平等起源論』という本を書いています。そこでルソーは当時、絶対主義王政であったフランス社会を徹底的に批判しています。わたしは、この『人間不平等起源論』のほうが、ルソーの個性がより良く表現され、そしてここに、かれが再発見した、近代民主主義の原点が示されていると思っています。そこには、現在の日本社会で、民主主義を取戻すとはどういう意味かを考えるヒントが、たくさん描かれていると思います。

当時ヨーロッパで最先端の科学、芸術、そして哲学を誇り、ルイ王朝の栄華を極めていた18世紀フランス社会において、絶対王政、階級社会、民衆たちの貧しい生活を目の当たりにして、ルソーは、いかに当時のフランス社会が人間を墮落させたかを唱え、哲学者仲間を驚かせました。もっとも進んだ社会に生きているという、自信たっぷりの哲学者が多かった時代に、ルソーはむしろ、そうした進んだ社会に生きる者たちよりも、素朴で質素に生きる農民たちのほうが、理性の声・正義の声に耳を傾ける力があると考えたのです。かれにとっては、身分が高かったり、お金儲けをしている者たちよりも、自分自身の必要から実直に日々生活をしている民衆のほうが、社会の決まりごとや世間体ではなく、自分自身の良心に従って生きていると思えたのです。

良心という言葉をここでも英語で説明すると、conscience、かつてボディコンと

という言葉ではやった、身体の曲線を強調したボディ・コンシャスとか、女性運動におけるコンシャスネス・レイジングという運動のなかでも使われている、「意識すること」といった意味合いの言葉です。コンシアンスも分解してみると、conというのが一緒に、という意味で、シアンスは、サイエンス、つまり知性・知識という意味です。ルソーは、良心を大切にした哲学者ですが、そこには、自分自身を知る、自分自身と一緒に知を獲得するという意味が込められています。つまり、かれが良心を大切にしたのは、身分や生まれにかかわらず、どんな人でも、自分自身で考える力がある、自分でしっかり考えれば善悪の判断がつくという信念があったからです。おそらくかれの良心という考え方が、かれの同時代の哲学者と、かれを分けた一つの理由ではないかと思います。

自分こそが、よい部分も悪い部分も含め自分のことを一番知っている、自分には嘘をつけないこと、そして誰にでも自分を見つめ、自分を反省する力が備わっている。そして自分の力で考えれば、おのずと何が正しく何が不正であることを理解できる、という、良心に基づくルソーの人間観こそが、ひとはすべて生まれながらにして自由で平等であるという人権思想へとつながっています。たとえば、のちにルソーに感銘を受けたカントというドイツの哲学者は、ルソーが良心を通じて発見した人間の平等な能力のなかに、そもそも人間に備わっているとされた、尊厳を見いだします。

さて、ルソーは、当時のフランス政府が維持していた階級社会における法律は、強欲な権力者による暴力の結果だと考えました。貧しい者を苦しめているだけでなく、富める者にはますますの富を与え、貧しい者をさらに搾取する道具こそが法律であると批判します。とりわけ、かれによれば、階級社会の権力者たちは、弱者のため、という口実のもとで、ますます一部のものに法律を作る権限を集中させ、当時の不平等社会を強固にしていたのです。

ここで、実際にルソーがなんと言っていたのか、引用してみましょう。

「社会と法律が弱い者には新たなくびきを、富める者には新たな力を与え、自然の自由を永久に破壊してしまい、私有と不平等の法律を永久に固定し、巧妙な篡奪をもって取り消すことのできない権利としてしまい、若干の野心家の利益のために、以後全人類を労働と隷属と貧困に屈服させたのである」

ヨーロッパ社会のなかでもとくに、フランスの先端性と豊かさと美しさを誇りにしていた哲学者が多いなか、ここまで徹底的に社会批判をしたルソーは、その

後友人の多くを失い、失意の下で精神に異常をきたしてしまいます。

かれは、自分が生きていたフランス社会を、崩壊寸前の社会だと考え、次のようにも表現しています。

「墮落し、悲嘆にくれる人類は、もはやもと来た道へ引き帰すこともできず、不幸にしてみずから獲得したものをすてることもできず、自分の名誉となる諸権力を濫用することによって、ただ恥をかくことに努めるばかりで、みずから滅亡の前夜に臨んだ」。

財産に対する権利が、ひとを強欲に、野心家に、そして邪悪にし、正義の声を窒息させたと判断したルソーが、破滅から人類を救い出すと考えたのが、民主主義のしくみです。先ほど説明した良心・コンシアンスト、民主主義がここにつながるのです。

法律が一部の強欲な権力者たち、富める者たちだけが決める占有物となってしまうと、大半の民衆はただ、法に従い、隷属し、そして権力の道具のように扱われてしまいます。ルソーは、法律に従いながら、かつ、ほんらいの自由で平等な人間性を維持できる仕組みを民主主義だと考えました。つまり、一人ひとりが自分で従うべきだと考えた法律にのみしたがうのであれば、つまり、自分で作った法律にだけ従っている状態であれば、それは隷従ではなく、むしろもっとも人間にとって自由な状態だと考えたのです。

主権在民とは、基本的人権を備えた平等な人びとが、自分たち自身で法律を決めるという意味です。ですが、自分勝手に、自分だけに都合のよい法律をばらばらに決めたら、それはたんにやりたい放題な社会であって、そんなことはむしろ社会を破滅させてしまうのでないかと考える人もいるかもしれません。

ここが、優れた人が法律を作る貴族政治こそ最良の政治であると考えた哲学者と、良心の声を信じて民衆たちによる政治を考えたルソーとの大きな違いでした。不平等で不正な階級社会を前にしたルソーは、貴族ではなく、むしろ一人ひとりの民衆の力を信じたのでした。かれは、こんな言葉も残しています。ルソーの言葉のなかで、最もわたしの胸に響く言葉ですが、どこか「痛み」を伴った言葉だとも言えるかもしれません。

「未開人は自分自身のなかで生きている。社会にいきる人は、常に自分の外にあり、他人の意見のなかでしか生きられない」

ルソーは、他人にどう思われるか、社会でどう評価されるかについて、そのことは少し脇において、自分はいったいどう生きたいのか、自分にとってなにが自由なのかを真剣に考え、そして自分が正しいと思うことに忠実であれば、「ひとはみな自由で平等であるべきだ」といった一般的な原則に、誰でもたどり着くことができる考えたのです。先ほど触れたカントは、良心という考え方をもっと洗練させて、「人を殺すな」「嘘をつくな」「ひとを道具として使うな」といった普遍的な法則を、人類の尊厳がかけられた普遍的な法則として見いだしていきます。

長くなりましたが、最後に、民主主義を取戻すとはどういうことなのか、という今日のテーマに答えて、話を締めくくりたいと思います。

いま、心無い、良心のかけらも無い心臓の持ち主たちに、民主主義が破壊されようとしています。ルソーがいうように、民主主義とは、わたしたち一人ひとりが自分の力で正しいこととはなにか、絶対にしてはならないことはなにかを判断することによって、実現する政治体制です。市民の力で民主主義を取り戻すためには、なにか特効薬があるわけではありません。

安倍の心臓のような人たちから、民主主義を取戻す、民主主義を守るためには、わたしたち一人ひとりが、その能力を発揮して、自分たちでしっかりと判断する力をつけていくことが必要なのです。それだけのこと、といてしまえばそうかもしれません。ですが、このことが、現代において民主主義政治を実現することを、とても難しくしている一つだとも言えるでしょう。安倍の心臓の持ち主たちは、教育、メディアといった、市民が本来の力を発揮するための手段をも、破壊し始めているからです。

今日お集まりのみなさんは、すでに自分たちで政治を考えよう、世間でどう思われても正しくないことには、NOを言う、不正は正されなくてはならないという民主主義の原理をまさに実践しようとしています。ですが、違憲立法であろうと戦争法であろうと、企業の論理や他国の人を貶めたりすることをあたかも自分の利益になると考える人が多いのも、悲しいことですが今の日本社会の現実です。

民主主義を日本社会に取戻すためには、ルソーが素朴なひとに見いだした、小さくて、何の力ももたないような良心がフランス革命へとつながったように、わた

私たち一人ひとりの心に宿った力を育み、そして、自分できちんと物事を考えてみるという訓練を、多くの人たちと共に実践していかなければなりません。「民主主義ってなんだ？、これだ」という若者たちのコールはまさに、そのことをわたしたちにも示してくれています。

ここに今日集ったわたしたち一人ひとりが、今日の憲法集会にはまったく関心がないような人たちとも共に考える、一緒になって正しいこととはなにかを考えようとする、まさにそうしたコンシアンス運動、自分自身の良心に耳を傾ける実践を続けていく。この民主的な運動を続け、一人でも一緒に政治を考えてくれる人を仲間として作っていきましょう。

もちろん、その運動は、若者たち、ママたち、これまでずっと9条を守ろうとしていた人たち、労働者たち、そしてわたしたちがいま、実践していることです。そして、次の参議院選挙に向けて、民主主義の大原則である、市民の声を法律にするという主権在民を実現するためにも、今後もさらに共に知恵を出し合い、共に行動していきましょう。